

ラブホテル街形成史への提案～坂内論文への応答～*

A Proposal For Building History OF Japanese Love-Hotel Districts : An Answer For The Bannai Paper *

大矢正樹**

By Masaki OYA**

ラブホテル 主にカップルの性行為に適した設備を持つ部屋を、短時間（休憩）もしくは宿泊で利用できる施設。日本や韓国特有のホテル。（Wikipedia）

1. はじめに

近年、“偽装ラブホテル¹⁾”についての記事がマスコミで散見されるようになった。“偽装ラブホテル”とは、“建築確認申請時や営業許可申請時にはリゾートホテルやビジネスホテルとして最低要件を満たしており、営業後ラブホテルとして運用されているホテル²⁾”である。ラブホテルの営業禁止区域に建築されることが多いため、住民からの建設反対運動が起こったり、既設のホテルに対する取締り要望が警察に対して寄せられたりしている。警察庁においても2009年3月に第1回風俗行政研究会を開催したのをかわきりに検討を進め、風営法の改正による“出会い系喫茶”および“偽装ラブホテル”の規制を検討している³⁾。本稿は現在進められている風営法改正の動きを念頭におきながら、戦後の法制度と都市開発がラブホテル街形成に与えた影響を検討することによって、ラブホテル街形成史へ一つの視座を提供しようとするものである。

2. ラブホテル街の形成要因について

(1) “坂内論文”の意義

坂内は“ラブホテル街形成史に関する研究(序)”⁴⁾において、「ラブホテル単体」ではなく、「ラブホテル街」としての歴史＝ダイナミズムを明らかにしようとした(以下“坂内論文”と略称する)。ポアンカレが“問題を提起することは問題を解決することより大切である⁵⁾”と述べたように、“坂内論文”は「ラブホテル街」という研究領域が存在することを示したという意味において画期的であった。今後ラブホテル街について論じよ

*キーワード：観光・余暇，ラブホテル，風営法

**正員，株式会社環境創造

(京都市中京区新町通四条上ル小結棚町426-1 新町錦ビル，TEL:075-254-8811，E-mail:oya@issr-kyoto.or.jp)

うとする者にとっての必読文献となることはまちがいない。また“坂内論文”が既に「風営法上のラブホテル届出をしているホテルの数は、実態的なラブホテルの半数ほどであるという」と、今日の偽装ラブホテル問題の背景について言及していることは特筆されてよい。

坂内によるラブホテル街形成仮説

“坂内論文”ではラブホテルの歴史を概観した後、鶯谷、池袋西口、湯島、円山町の4つのラブホテル街の形成過程を分析している。全般的な歴史のスケッチからラブホテル街一般の影響要因を明らかにし、それを踏まえた上で個々のラブホテル街の形成要因を抽出する構造となっており、説得力がある。そして4つの事例を「荒野筍生型(鶯谷、池袋西口)」、「花街転生型(湯島、円山町)」の2つに類型化し、「荒野筍生型」については「駅前近くでありながら街区の形状やロケーションによって大規模再開発の波をかぶらなかった場合に、ラブホテル街が生成・発展」し、「花街転生型」については「夜型のアクティビティが既に存在したために、鉄道駅との距離や街区形状にはあまり関係せずに、夜の業種が横滑りした」と仮説を提示している。坂内のラブホテル街形成仮説の当否はともかくとして、“坂内論文”はラブホテル街の形成要因を初めて考察した論文として画期的な意義を有している。



写真 2.1 ラブホテルの事例(大阪市北区堂山町)
(ラブホにはメルヘンチックなデザインのものも多い)

(2) ラブホテル街の形成要因は何だろうか

本節では“坂内論文”の成果を踏まえながら、著者なりにラブホテル街の形成要因について考えてみたい。

a) ラブホテル街の定義と区分

はじめにラブホテル街について定義しておこう。本稿では、「ラブホテル街：実際にラブホテルとして営業しているホテル・旅館が三軒以上隣り合っている通り、または5軒以上のラブホテルが集積しかつラブホテルの敷地面積の合計が全体の半分以上を占める地区」と定義する。直感的な定義ではあるが、通常の“ラブホ街”のイメージに合致していると考ええる。

ラブホテル街の規模を集積するラブホテル数によって区分し、20軒以上のものを大規模ラブホ街(aa)、10軒以上20軒未満のものを中規模ラブホ街(a)、10軒未満のものを小規模ラブホ街(b)と呼ぶことにしよう。

次にラブホテル街の立地場所によって都市型と郊外型の2つに区分する。都心の盛り場から直線距離で3km圏内(盛り場から車で10分圏内)のラブホテル街を都市型(A)、それ以外を郊外型(B)と定義する⁶⁾。郊外型ラブホテルは盛り場の影響圏外に立地するもので、高速道路のインターチェンジ周辺や郊外の幹線道路周辺に立地しているラブホテルが代表的な事例である。60年代後半~70年代前半に立地したものが多く、ラブホテル街を形成する事例は少ないものの各地に存在する。

ラブホテル街の区分イメージを表2.1に示している。われわれが通常みかけるラブホテル街は、Abタイプ(都市型で10軒未満の集積)であり、“坂内論文”で事例として検討されている鶯谷、円山町はAaa(トリプルA)タイプ(都市型で20軒以上の集積)のごく稀な事例であることがみてとれる。AbからAaaに成長するためには何が必要かと考えることによって、ラブホテル街の成立要因が推察できそうである。

表 2.1 ラブホテル街の区分

		立地場所	
		都市型(A) (都心の盛り場から3km圏内に立地するラブホ街)	郊外型(B) (都市型ではないラブホ街)
規模	大規模(aa) (20軒以上集積)	Aaa(トリプルA) 東京、大阪に稀に存在する(鶯谷、円山町等)	
	中規模(a) (10軒以上20軒未満集積)	Aa (人口100万人以上の大都市に存在することがある)	
	小規模(b) (10軒未満の集積)	Ab (ラブホ街のほとんどがこのタイプである)	Bb (事例としては少ない)

b) ラブホテル街の形成要因

本項では都市型ラブホテル街を対象に、その形成要因について著者の仮説を提起したい。

仮説1：潜在的ラブホ需要が存在する。

現代のラブホテルに相当するものとして江戸時代には出会茶屋があり⁷⁾、明治~戦前までは待合があった(待合は現在も存在する)⁸⁾。この歴史的事実から、潜在的なラブホ需要は常に存在すると考えて良いと考える。

仮説2：潜在的なラブホ需要を顕在化させる具体的な装置がラブホテルであるが、その供給様式は時代毎の経済・文化に依存する。

ラブホテル需要は常に存在するが、それに対応した供給様式は時代毎に異なってくる。“モーテル”が登場するまで多くみられた“つれこみ旅館”は発展途上だった当事のわが国の経済力を反映したものだったし、現在のラブホテルの原型を作った“モーテル”は、1960年代後半から急速に進展したモータリゼーションを背景としている。需要をどのように具体的な形にするかに際しては供給側の意図はどうであれ、常に時代の文化と連動している。

仮説3：ラブホ街の形成要因は経営者にとって集積効果が見込まれるためであるが、その規模は周辺環境や法制度及び都市開発動向に作用される。

都市型のラブホテルを経営しようとする企業家が、立地先を選定するとき候補地として選ぶのはどこだろうか。まず候補地として考慮するのは、はやっているラブホテルの近くであるはずだ。そこは需要のみこめるラブホテル敵地であることが実証されているのだから。業種は違うが、ソーブランドとして著名な滋賀県雄琴の場合、最初の店が大成功した翌年には21軒の店からなるソーブランド街が形成されていた⁹⁾。同種の店が集まった方がポテンシャルが上がるというごく普通の原理に従った結果、ラブホテル街も形成されてきたと考える。ただし都市型の場合、周辺環境や法制度の制約や都市開発の動向によって、ラブホ街として規模を拡大したり、逆に消滅したりすると考える。

3. ラブホテルに対する需要

前節では“潜在的ラブホ需要が存在する”と仮説した。これが正しいとするならば、ラブホ需要は人口に比例する、すなわち直線回帰が可能のはずである。そこで、警察庁の資料(10)を用いて都道府県別の届出ラブホテル(風営法の店舗型性風俗特殊営業第4号営業として届出がされているラブホテル)数と人口との相関をみたのが図3.1である。決定係数² = 0.26で相関は低いが、これは、東京、大阪、神奈川、愛知、埼玉、兵庫など人口が多いのに届出ラブホテル数が少ない地域が存在するためと考えられる。ちなみに、東京都の届出ラブホテル数は115で、北海道の届出ラブホテル数217の約半分となっており、届出ラブホテル数が実態としてのラブホテル

数とは大きく乖離していることがわかる。

届出ラブホテル数が実態を反映していないことがわかったので、届出ラブホテルと偽装ラブホテル（類似ラブホテル）との和と人口との相関をみたのが図 3.2である。決定係数 $r^2 = 0.87$ となっており、人口とラブホテル数とは線形関係にあることがみてとれる。これより、ラブホテル数は人口に比例するとみなしてもさしつかえないことがわかる。

都道府県別の届出ラブホテル数と偽装ラブホテル（類似ラブホテル）から地域特性をみるために散布図を作ってみた（図 3.3）。長崎、東京、埼玉、神奈川、兵庫は届出＝類似の直線のかなりに上に位置しており、偽装（類似）ラブホテルの割合がかなり高いことがみてとれる。

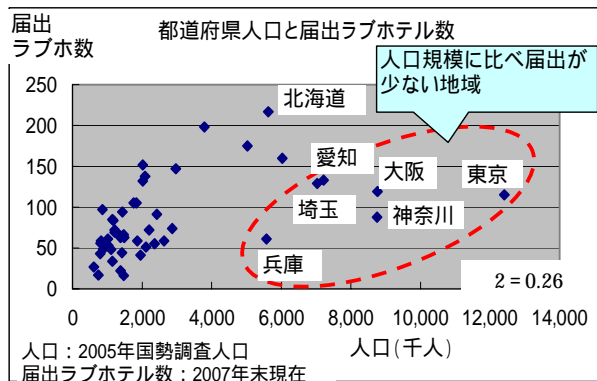


図 3.1 都道府県人口と届出ラブホテル数

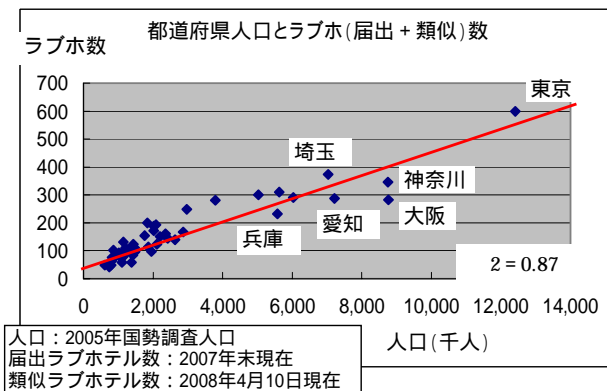


図 3.2 都道府県人口とラブホ（届出＋類似）数

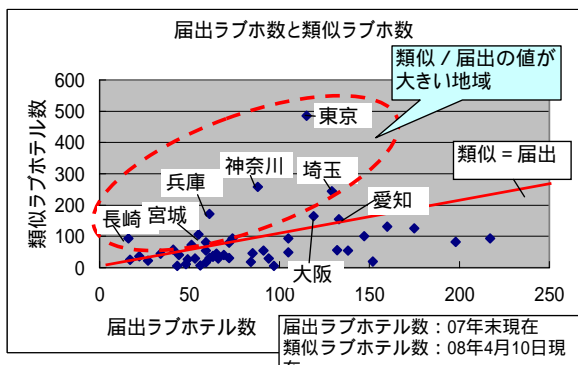


図 3.3 都道府県別の届出ラブホテル数と類似ラブホテル数

ちなみに、東京都の偽装（類似）ラブホテル数は485（2008年4月10日現在）で、届出ラブホテル数の4倍以上あり、長崎は約6倍ある。

本節の検討で、ラブホテル数は人口に比例するとみなしてもさしつかえないこと、地域特性にはかかわりなく全国一様に“潜在的ラブホ需要が存在する”ことが明らかになったと考える。そして、長崎、東京、埼玉、神奈川、兵庫のように偽装（類似）ラブホテルの割合がかなり高い地域が存在するという事は、ラブホテル街は周辺環境や法制度の制約や都市開発の動向に左右されやすいことを示唆しているようである。

4. ラブホテル街の今後の動向

本節では、ラブホテルの今後の動向について私見を述べたい。

戦後のラブホテル街形成史を考える上でのメルクマールとしては次の3つがあげられる。

一つは1960年代後半から70年代前半にかけての“モーテル”の増加である。“昭和48年警察白書”によれば、1968年には全国で1400軒あったモーテルは72年には6000軒に達した。現在の“偽装ラブホテル”問題と同様、「既存のモーテルに対する苦情や抗議あるいはモーテル建設に対する反対の陳情や請願等が各地で相次ぎ」、「モーテル営業に対する規制の抜本的検討が行われた」結果、1972年7月風営法の一部改正により、ワンルーム・ワンガレージ形式のモーテル営業の規制が行われた。これは、都道府県条例で営業禁止地域を定めた地域においては、新規の営業はもちろん、既存のモーテルに対しても構造の改善もしくは廃業を求めるもので、ワンルーム・ワンガレージ形式のモーテルは姿を消すこととなった。

二番目は、80年代におけるラブホテルに対する意識の変化である。ガイドブックにラブホテル街が紹介されるようになり、ラブホテルを利用することに対するうしろめたさは若い世代では消滅した（著者は「うちの高校では、チャリに乗ってラブホテルに行った」と聞いたことがある。）。80年代に入ってから、週刊誌等では従来の「風俗」に変わって「フーズク」と表記されるようになり¹¹⁾、「フードル（フーズクのアイドル）」まで話題となったが、ラブホテルの隆盛はこのような80年代の空気の反映でもあった。これに対して、「最近の風俗環境の悪化は、もはや看過できない状況にある（昭和60年警察白書）」として、風営法の抜本的な改正が84年8月に行われ85年2月に施行された。この風営法の改正により、ラブホテルも新たに風営法の規制対象となった。

三番目は1990年のバブル崩壊である。89年末には38,915円の史上最高値をつけた日経平均株価は90年はじ

めより下落を続け、10月1日に一時19,781円と2万円を切る大暴落となった¹²⁾。大蔵省が4月に実施した金融機関による不動産向け融資の「総量規制」を引き金として地価の下落も始まり、「失われた10年」が始まった。大都市ではそこかしこで地上げをしたまま放置され歯抜けとなった土地が見られるようになった。盛り場の中でも、企業接待をターゲットとした料亭や高級飲食店の中には撤退を余儀なくされる店もはじめ、その後をフーズク関連の店がしめるようになった¹³⁾。主に駅周辺の風営法によるラブホテル禁止区域において、“偽装ラブホテル”が立地するようになったのもバブル崩壊をきっかけとしていると考える。

その偽装ラブホテルの増加傾向についてもそろそろ終わりそうである。兵庫県警は一般のホテルとして営業許可を受けながら、実態は“偽装ラブホテル”を営業したとして、2009年2月ホテル経営会社の社長を逮捕した¹⁴⁾。これは警察の意思の一つのあらわれとみられ、現在検討されている風営法の改正により、“偽装ラブホテル”はその外観や営業様式を改め、シティホテルのデイ・ユースと同じ様式をとることを余儀なくされよう。これによりラブホテルと通常のホテルの境界はあいまいになり、逆にシティホテルのデイ・ユースが一般化する事態も予想される。

5. おわりに

本稿は“坂内論文”への応答を試みたものであるが、著者の力量不足により当初の意図を達成できなかったことを、ラブホテル街の研究に先鞭をつけた坂内良明氏にお詫びしなければならない。氏が“坂内論文”の最後に記したように「課題はあまりにも多い」のが現状である。ラブホテル街の研究は、夜のアクティビティ研究の一分野として位置づけられるが、同研究についても、「詳細で信頼性の高いデータを得るための工夫」が求められている段階にあり、「行動の実態と態度・意識等を含めた意思決定メカニズム」の解明には程遠い段階にある¹⁵⁾。夜のアクティビティの研究の進展に伴って、ラブホテル街の研究も進歩することを期待して本稿の結語とする。

注

- 1) 警察では「類似ラブホテル」という用語を使用しているが、本稿ではマスコミの表記にならない「偽装ラブホテル」を用いる。
- 2) 特定非営利活動法人全国偽装ラブホテルをなくす会のホームページによる。http://nomoregisou.net/
- 3) 「出会い系喫茶と偽装ラブホテル、風営法で規制検討」, 朝日新聞朝刊, 2009年3月12日, http://www.asahi.com/national/update/0312/TKY200903120111.html
- 4) 坂内良明: ラブホテル街形成史に関する研究(序), 土木計画学研究・講演集, Vol.33, CD-ROM, 2006
- 5) ポアンカレ(吉田洋一訳): 科学と方法, 岩波文庫, 1953
- 6) 金益見(きむいっきょん): ラブホテル進化論, 文春新書, 2008, p63. 1970年代後半にラブホテルという言葉が生まれた当時は、“都市にあるのがラブホテル”“郊外にあり、車で直接入れるのがモーター”という使い分けがされていたという。
- 7) 杉浦日向子: 杉浦日向子の江戸塾, PHP研究所, 1997, pp.109-114. 江戸時代は鰻屋の離れが、ラブホテルとして用いられていたという。出会茶屋は低料金のラブホテルで、不忍池周辺に多数存在した。
- 8) 井上章一: 愛の空間, 角川選書, 1999, pp.68-130. 待合は芸者をよんで遊ぶところであるが、ラブホテルとしてもよく用いられていた。
- 9) 大矢正樹: ロードサイド・フーズクの誕生, 北村隆一編著『ポスト・モタリゼーション』, 学芸出版, 2001, pp.92-94
- 10) 警察庁: 「風俗行政研究会 第1回会合配布資料」, 2009年3月18日, http://www.npa.go.jp/safetylife/hoan1/material.pdf
- 11) 島本慶: なめだるま親方のフーズク大全, アスペクト, 1998, まえがきに代えて. 島本は、ノーパン喫茶で出会った女の子たちはからりと乾いた、カタカナが似合う子たちだったので、「フーズク」と書かずにはいられなかった、と書いている。
- 12) 黒木亮: 巨大投資銀行上下, 角川文庫, 2008, 日経平均株価については上巻のp.419, 下巻のp.7による。
- 13) 大矢正樹: 盛り場空間とフーズクの立地パターンについて, 土木計画学研究・講演集, Vol.33, CD-ROM, 2006
- 14) 山陽新聞 WER NEWS 2009年2月23日 http://www.sanyo.oni.co.jp/news/2009/02/23/20090223010003691.html
- 15) 大森宣暁: 夜のアクティビティ分析に向けて, 土木計画学研究・講演集, Vol.37, CD-ROM, 2008